鳩翁道話　五

4

二

ロ　9
4081
4

續鳩翁道話抄之上

男　武修　聞書

湯の盤の銘にいはく。苟に日に新に日々にあらたにして。又日に新なりと。これは大学の伝にして。民をいつくしみにするとを御示しなされたものでござります。先湯の盤の銘といふは。昔もろこしに。殷の湯王と申しまする聖王のおはしまして。其はじめは小国の君なれども御徳の盛なるによつて。諸おほく起て天子

とがなりあそばし。殷の世六百年の基をひらかるゝ
恐ざれましく。かやうの明君なれども。猶ゆだん
このあまり常に御心を。くるしめさせ給ひ。盥
仏し盤の銘を。明記しなされたを。湯の
盤の銘と申まする。苟に日に新にして日々に
新にして。又日に新なりとかれ。夜も中々人は
天よりうけ得る。固有の本心と申して。明らかなる
徳がうまれ付く。ござりますとも。利欲の
為に。昏されまして。暗がある。なればべ人の

事のおこりは気の蒸ます。いかにきよくとも。よごれ仕るうちを
そのまゝで垢づく。されども。行水して。あらひきよめるべ。
そのごとく。気の蒸に。なるまゝを捨おかれ。まゝ垢
づく。始て日々に。あらひきよめたく。垢をとれば
も事は気の蒸なりとも。まその如く。一たび利欲
ふくみてるも。内に自らかへりみて。つねに拭て。
おのをつくしに日々に思ひ拭くて。本心をあらひ
みがけて。徳かのごとくあらはれて。大きくいかに
国天下をもおさめ。小さくいへば。家内をおさへ

備まる。此道理を御発明なされ盤にお志るし
なされて。志かも真実ぐわらりとあけはなしなされた思召
苟に日に新に日々に新にして又日に新
なりと。お志るしおかれたものじや。是が殷王殿の
湯王天の明命を。かへりみ給ふ。実なるでござります。
されば聖人の御勤でござりまする。日々におつしく
なされるに。我どもは存ぜずと思ふて。
瓢箪の川なぞへ入れた様に。どこへやら浮くと
いふ事もなく。ぶらくではコツリぶらくではコツリと

鼻うつても。けつまずいても。恥しいとも思はず。其の
くせ気肉を叱りまして。無理むたいに治めよふと
するは。ナント治まらぬものでござりませぬか。能まへ
人を治めうと思ふて。己が本心を明かにせいでは
不孝者をかくするものでござります。本心を明
に。ふしぎな話じや。覚えて居るすがたを。又其惑ひを
捨ておく。ヨウ考へて見らつしやりませ。埃をはらひで軽
儒者のさんとをしへず。ほんのうわべなり。其の日
一日なりとまづ吉凶を。翌日は極まらへば。まさに

さんは塵がたまつてある。それをとらずして捨置て七日も半年も掃かずに置くと見るがよい。十日たゝぬうちに一尺ほど塵がたまりて人の心ともまた是と同じことで。たまたま一日怠りしんでも手を捨ておけば煤黒になつてくるは心の塵をよく払ひさるまさしませぬよし又毎あくたゝるをそれゆへにも二町三所に中のなかまくに掃除することく町にすこしくうんよけいにしますてとても掃除とするのし。吋嚀になさりませ。去りし分折にかせばしとて。心の掃除をするとき

ましてる。志やうじの掛りておるとかつ川に大の人まんが出来まする。是そうひ出して法があつ。先年播州へおりましたる武人の法によけ近所に家があつ人があつく此のはニ国甚因の房が。建ましく社がさ近天井につさ上意。家近のこのことで。ぞう極ざんぐりと出来あがつて。ソコテ乗屋がそとひきる表奥屋がそして出すれやう。志やうもなうて離さなると。それへ下女もノと小どのも人できる業事がつのは仕人。おん人しけとのよりふ。やくく

掃除とさせ申さ。さらくさらが出来ると主が
うんぷんをせらるる十二ケ寺の森までと寺の森よし
自まへ中からいなけれども。おなじ中く合点せぬど。
後から出目の孫を出して。隠子のさんの十そくを
のそきままうり。此坊主掃除の仕やうで。ドフあづの
出来るものじや。かまが居らぬある。掃除道具を
ならべといへ。ドフデノおまへがせぬとが。指がおくまいと。めつ
たにしかるまいとふて。小者がん和尚一の名をしらせ
くるも。其身から。掃除道具をとりに出させて。

それは竹とはさく削り魚ぐしとなるもあり
が又竹箒雑巾が一ツ。寒竹の。小さな火吹竹が
壱本。ナントめづらしい名ぞくそうじや。ござりませぬ
欲がうけずうちとんまとへ魚串のさきで。綿雑巾と
またさ。扇子の横ざん一本で。団扇まで。燭へ
かの火吹竹ひをふき行く。フツくとふつまるさの
まてるこ気のどくなるものじや。さて掃除仕まうて
それぐ気がすんだとひらへらざこ盆をとりよせ。
座敷のまん中へすわりてまくらを脱ぎましく

おりふし、ふわりの時刻は四ツすぎ。ひだりの
席かのまんが。実かげ客のこ。日がくらむ。なさ
とまをいう給まふ子をのと叫ぶ。横町の補屋へ住
く様の一番楽をねそおいくさ。小者置て
大だらひと。まさうよもちくつると。コリヤくそちら
ふおくゑ。井戸の側へおて仕く。切るぶて肉と
おを。庭ましつもぐくつさりとたしつくすぶん
とりまいるの桶と一ぱい汲らせ長七と手堺まして。
この料女の上へ。ソツトおくこいといゝくる。小者

こゝろえ、私滞くその適りかして持てくると。コレさしや。己
が居所よ。ゆうへいは朝鮮がしてがよる。わろく
おしやき。下女が團扇とりてくると。主居がりて
法紙めらぶ。あつ居らしくかの團扇とひさげ。
たのひのわへぶんぶう臭ちと。宿のものとそ。提
ながうかの日のさしらむ所へかま團扇とさし
出し。上へゆげらうかへおろしらり内のひくせうふ
してふうて物をすかのどやとおりへらて。実上
宿かうら。さし込ら新まに一面のひる。ほうりがえ

ゑる是の手にかゝる因果。その後をとるものかんばじや。
ナント めづらしい掃除ずきじやござりませぬか。是
みな心の掃除をせぬゆゑ。気随気儘が増長して
味噌汁がてらてんへあがり。此親がかん癪おこして
わすれたか。この心ぐ。勘気を治めやうとしてもと。一家
親の気がおもふやうにならぬ。女房が気がうつうつして
どうもならぬ。亭主どのが。気が短うてどうもならぬ
手代がのらくらでどうもならぬ。亭主は目をふさぐ
どくもならぬと。心頭八百のさへんが隙がない。ヨウ

さふくからうじゆせ。それ程にめかくしのやうな
ものが出来るぞ。此の月は大晦日まで[illegible]
縁へ。やつて其まゝをいふてかくと叱る。
おのれがゆうに。面白がるくせまして。つきくは呼
旨に用心がとてるものの。家[illegible]
折くしぜ今のいきさつをもつもしてぞくと。
年寄にひどくしやうぞ。埒のあかぬ事じやあるまいと
日がな一日。小言いふて。此たびはもちがつてゐる。
女房も気がみだれて。息子も嫁を疎遠にする。

手代も丁稚もせハしく。飯たき女までいそいで
おの〳〵ほどよく持場をつとめるぶんなるほどにごうり
御せう夜に起き出て。門の戸引わけ。表をはく
らゆる。飯焚くせう。家内中がくしても出川きく。
気の毒く小。飯をたけつく。茶釜の下を
たきつける。主翁もうちまかせ。いつも壺ハいつもの
久しき。役の年ハ之一年中。嫁女もよくこそしく。先で
よくそうぢをして。こゝもませう茶ヨウむかへく
でらう。ますせ。女房へ女房らく。家の者いうまいし

ほどき。師走でも。正月のこゝちともおもはゞ。顔付
しかく。それの医者どのゝ指南。気が鈍くて命を
せまりたまふものしやうあいなれ。元で辛抱がならぬ
と。小芸ぶり。女房の云ふやうに。長ともまたと
奉公人もうち捨てゝ。家が立たうやうにならぬ中く。着
おちくめしかゝるまへ。置すへる丁稚どのが。小便が
来たときに。戸をゆると。お門機が森所のゝすわかん
のやうに。首実出し。モウそろく。家内を起し
御せう来ないつさ。旦那どのが森云まゐる。屋

ことなれはちから荒く。ごうするものじやと。いくらく
わ女めらしねがはで。一向夕めしと一緒に。茶の下を
しらさ牡ませうとおもへ。気でわトント信ましぬそのじや。
よくよく人の気質みん。色さかあるそあるくがあるのぐ。
ちようど家がおこまするのじや。俗には大工との家と建る
に材木のちいさくりでもと使さなし斗だと家はさくぬ。
人の家門もそれぞれ気のみでるるもちいと。編屋も
埋屋恐も皆入用じや志くしむるめ指かさいと。
まぁるくでかつ川く治しめさをあさる婚のかろ恐あん

よつく。三味線の連弾とするのは。胡弓が。はし
うたをはじめて弾くわるとやかましい斗で。面白う
あへ。すががへカンでいさ。すががはオツで弾く音たつ
ちがふく面白い。そをきかう程琴がさらう。胡弓が
そらう。志絃つくて笛すりが。色々の音をの悩しる
ほど。ワまく離れ。おもしろうなる。まてし二ようか
らずわうか。調子がいとうてきまつくるいと。書きし文
ゆうまさしいどうかくもんとつまうぬ。故に聖人
楽を者しく。金石絲竹革木匏土の

八音をとゝのへつゝ。それハすでにこもり
ませぬか。玄人の家を遠ざけハ。曲文を以てこゝにこと
なり。琴三味線のつま弾き。調子を以てきこえすなり
ある人のいはるゝと。親太夫を以て。きこえ給ふにかへるこ
絃よ音もうたと工合よう。あらそひのものじや。むかし
漢云ふ月ふしと譬と聯と二人。常に交つて
酒を飲んで楽しみ。肩がふれ合ひ。ふたりが拍子とり。つ
んだがらりと離れ。かのときは他の二人が。さら
とりの旋律に。声を和き太夫が。あまた人多く

きるこゝ。太夫よくしとのへが。盲一どんに安附さん
とかの本。方角が志までぞ。どちらハ火の手を見付
るまで。纏のけぶりのすゝなしに。気毒や鳶ハ。
此年のかる風ひけく。のまに近んともせに
既に三人。必死の身となりとさ武人うけ付て。
まつ眉らふ。纏のけを顔せくうせ鳶は
目くうのをひさとをすこし。掾ハ途中から鳶
に方角で。指さしてみせる鳶ハ。太夫と合点
いかめしのをハ。くもり出せと。盲ハ方角ハ

しかしながらと足ハ達者なまゝ。ぶらりと御ふくほん
がくえといへば。ちよく先きとのがまへて此先生の
縁ござりますこまがりしらずしや。まいう
うらひく家門が治まりませぬが。二人ともの難ぎさ
おつこちふさのしや。御用心なされませ。此事ハ
かんおうちめ育。主親のいふことハ耳へいつらぬ辛仕す
ほしひのこし援もまらうするともあつとのぐ。
こゝらのまゆみす文でもさわつぐり。まがくしく家門の名を
内の様いし是なるんとつけても。家門が治つて

治まりませぬ。治まりませぬ害じや。主人も家来も女
房も子ども。親も大切な調子が。ござりませぬで
よつく面白うでないものでござります。
又全く。肝心のそうつまらぬ心が脩まりませね
のじや。外があさましいものでござる。家内が治まりませぬ。
とくしんの洗濯が大事じや。夜數の　せん
ごくふ。絶えまするあかと。鍋の中で棒ふら虫が
まされますりん文心のせんがくしく。内斜がると
あのうらふ。いろくの虫がまらく。是のと

奥(おく)さまも丁稚(でつち)も下女(げぢよ)もおなじ、しつてござる。
まゝ御存(ぞん)じに世上の人が悪(わる)う見えし。我(われ)ひとりかしこし
こう覚(おぼ)ゆるが気(き)になつて人を他人(たにん)のやうなり
おもひ。我気(つうき)にいらぬ人を悪人(あくにん)の様(やう)にいふ。我を
ほめるものハ贔屓(ひいき)とおもひおぼしめす。仰しやうれんなく
我を誹(そし)るものハ道理(だうり)とハいひながら。かへつて眼(まなこ)をむき
きらひ、人の短(のり)なるを語るとて人の咎(あやまち)をとりて。人を
こまらせ、おのれを高ぶり。おのれハ正直(しやうぢき)といひならし
る。尾(び)でもる身(み)勝手(かつて)をさまざまになしてゐるをみる

んの法縦(ほんぶく)のごとくまつくらい虫(むし)じや。滅多(めつた)に他人(たにん)ハ
なりませぬ。堯舜(げうしゆん)ハ性(せい)のまゝにし。湯武(たうぶ)ハこれを本(もと)に
反(かへ)ると孟子(まうし)も仰(おほせ)られて。堯舜(げうしゆん)のやうな聖人(せいじん)ハ。
うまれながらにして知(し)り。安(やす)んじて行(おこな)ひなされまする
別(べつ)に修(しゆ)まつくことなし。その身をすぐに聖人(せいじん)じや。すぐに
湯武(たうぶ)にいたつては日にまし。ひゞにおしへて
情(じやう)をつくしてかへる。手前(まへまへ)なさうして終(つひ)に生(うま)れ
つきし。明徳(めいとく)までかへられて。聖人(せいじん)となりなされた。
さるによつて書経(しよきやう)に。その徳(とく)をわめし。諸(いさめ)を渡(わた)く。

帰らず。人は喪しく。傍りん事をわらへども。是を捨
むかふ。及ばざるがごとしすし。ひたすら見まもるが。ひとへに
明命をかへりみ。日新の功を。おこたりなくうけたまはり
らば。たとへなに何やめいくじもが。教をもうけて語を
もせぬ。自性気まるまで附をしらば。わくまよりのま。
なし。善でござります。此語を疑ごとのふぶる
のは。年寄見物おそりしの人も附じや。書籍をよぶる
さぬと。虫をちまなかの。むかし虫が出よふのと
まよふさせて癖り附く其人のうち。人乃

見るんもきかず。人が此の語をなしぬといつてはつかん
じやくを起し。我ひとりかしこがり。此上もない
そのくせりんれば。性をすてかんとたどんあまた住
くる事ハ不ら玉よりも重い。教家のものは。教
をおしすといつて細がよりり。教しい教を守つて
子あり。教しをいふ事ハおしの。気保そのを識る
よめ聖人をすると府弟そ初めげへまつこんで。
道くそりのみ語。それ是をまま親和するが私
まかおく。辞まいつて可やくの。らんがぬり

して。育さあやまりじや。人の子ハ教へずとも人らしく
なるべし。それそこらのハ大まちがひ。たとへバ米麦
をまけバ。米麦が出来るに。青ハなけれども。こやし
をつぎ。草をとり。さまざまに手のつくをせねバ実が
いらぬ。人の子もこまかをほしらずてうみ離しにして。
教へもせず。捨そだちに育て上く人らしい人に
なしぬと。心といふものハ。手習などのでハございませ
ぬ。かならず大病人ハ本復が仕まい。織さく
なるひ出来ず。なんよむでもかきしひなり。どうして療

治をせうぞ。幸に先師石田先生がひろめおかれた心
学ハ。無学文盲でも出来る学文じや。一寸ひらかん
と。えはけまするど。生れ付に。無理のない事を。
おりまする。此無理のない心を手本にしておそく
いたしまするおちかお慈の御が出来て。人なき
あこの心よめまする。ドフゾお手ようで此術を
なされて下さりませ。かくまでせバとて。文字ハ。
いらぬと申すのでハございませぬ。行て余力
あるときハ。則文を学ぶとある。それでまゐりますれバ

御隙のいる方は。おかけ出地とおよみなさるが宜しい。
志ある輩どもは。親より人ぷまふ法へ日用に追
まくられ。人は損をみけまひとも又ば。中々出地と。
よんどころなく隙がない。されバとして。学がすべりそ
おりませぬ。餘分ある心学でもして。せめて悟
別の手段と。せめてきそてなまけます思ふ。我と
おまじゆする。隙のない。お店へ。おすゝめ申すとてぞ
ござります。上お留時も。ちやんと留主じや。宮弁
く稽まいりも。ねのはそくろう。暇なる時がちのふて

よろしいじや。人参は結構な薬でも。二階から落て
目のまはつた人間に合ぬ。浮世のせわしい町人衆
まへ。よい教でござりますすなほにいつてしまはるるまれ
一ツ法の事人へ入れるとみがゐて志が立ましいこれまで
給く。おもしろい話がある。腑さかしおかへおされて
下されい。さるお町内に償振舞がござりまして
十二ケお年寄をはじめ。町役家持の人々一同
座につきますると。さまざまの祝ひぞある時かの
年寄は酒しやそれ。浮世の寄まで強く。輩の下戸

じや。座中を廻るさかづきの巡座さうして、ねつ
まゐると。亭主方が気のどくにおもひ、お年寄さまへ
御酒へめしあがらず御辞退なさりまする。チト、お菓子
なりとも、おあがりなされいと、南京の古漬の
壺に、大つぶの金柑をとりまして、少し蓋のあく
わりしる。座中もまはりよいおこのみ附ひらまゐ
菓子を。取つてまいつて、すゝめまして、年寄もまう
いたし、思つしが、擂鉢といたしませうと、壺を拵へ引
よう手首を突込しまするに、かしきしむやうにおもひくさう

料理に手をさし入ましたて、つまみ出さうとするに、手首
がつまりてぬけませぬ。どうぞして抜かれぬと、いろいろま
こじまわしてみてても、引くにひかれず、抜かうとすれば
胴のうへと。指ひつけ、どうなされましたぞ。イヤ
手がはさまりまして、足にうかぬけませぬと、
まじうりつなめて、間の気の毒、私が壺をもつて
居ませう。手首をつよく手をもつてひさしうしと一人が
もつて居るを壺をつまんで、つかまへ引と、年よりは
手をおくへひく、壺に思ひやと、引あへりつゝる。氣

清と云尾谷が。さしも鬢をする和なし。座中が一同
ふじろと気へど。年寄は中く笑ず。涙ぐみまお
てござりました。いらんでめけませぬと云。サア是から大
騒ぎとなり。医者どのをよんだれど。難波骨つぎ
でハ中くまいらぬと。酒宴の興もさめ果ましく。時も
名人根が一人すゝみ出て。いづれもお騒きなさるな。我等
くけなまかつてをるがある。むかし司馬温公と云人
幼きとき大勢の小児とあそびしが。大きなる甕のなかへ
落ひましたが一人の小児。にげまして。鉄つかの中へ

おちりました。大ぜいの子供ハ。うろたへて。にげ
ゆきしが。司馬温公壱人ハゆかずして。側なる手ごろの
石をとつて。かの甕へ投つけましたれバ。甕ハわれまして
水がながれ。小児ハ不思議に命を助りましたと。聖人の
話じや。今ハお年寄の御難儀。私が強ヨウ紙てある。
いかや鉄木が。司馬温公となりて。たとへバその古漆甕
の甕が。失れおちて。高金の甕でも。お年寄の命
換ハかへられませぬ。さあ何ぞしてくだされと云げ。
ひらへまなんだ。年寄ハ気のどくさうな。甕をとぶ

つゞ手をつき出し。此一トおもちや砕き。十二が笑中(ざうちう)ハ
金米糖(こんぺいとう)がちらりと腹(はら)をかすつて掛(かけ)になると。ヤレお
年(とし)よりのお脚(あし)のはきさつと。其(その)手をつかまへ。めけぬして
五臓(ごぞう)をなま。金米糖(こんぺいとう)と一ツにつんぐりまとめてしもうとカスを
じや。ナンと おもしい 結構(けつこう)いでござりませぬか。はしんごとめて
よろしいへけまいへ自由自在(じゆうじざい)。手(て)ハぬらりものと。一ヶ所(いちどころ)
つんぐり。首(くび)がちらざまでても。離(はな)すまいと。むくら腹(はら)
おもまれ。付(つき)をまぐりせり。自由自在(じゆうじざい)の。大平安楽(たいへいあんらく)が出来(でき)
ぬのじや。ちくやせぬ。諸(ぞう)ろよの事(こと)。此(し)ハやなまいし。

つかむものハ。毛(こま)がりでござない。霧雨(きりさめ)のようなものを摑(つか)み。
かしらいをはりて。傾(かたむ)けをしまするとつて。家(いへ)がらを
はりて。先代(せんだい)のよいのを摑(つか)んで離(はな)すまいとなぞ
いうところは欲(よく)。義(ぎ)と云(いう)事(こと)もあるれ。楽(らく)とする
事(こと)をなしたれど。積(つも)りも出来(でき)ず。陰分(いんぶん)うきふ積(しやく)
気(き)もおきるり。気志(うさ)あるり酒(さけ)のんでまぎらしましよう。
さりとそれハ。気(き)の毒(どく)なものでござりますと。壺(つぼ)ふろうて
仕合(しあはせ)でござんハ。行(ゆき)とてと陰(かげ)に事(こと)じや。身代(しんだい)の
壺(つぼ)をころめさきに借用(しやくよう)んが手(て)とでござりますす。其(それ)でも

ワが本心ハ。あきらかなり。明徳ハ雲かゝれハなし。煩悩
するぢからおこるぞと。ある人がおしへのじや。それとさ
よつてやたらにすゝまぬ。わしの中にも目くらが一人ござつて。
心やすい座頭ござ屋よりあひ。わきの者ハ七ツ立をさ
しくおされしより。むかふもしれぬ。わきさきのかつつきせ
ましたとさ。目くらハ座頭のならびとその人。杖を
かつぐ出ようとすると。亭主がいふにハ。夜深
ゆへ。挑灯をおもちなされ。おかしやりませう。ふと
いわつしやる中に。盲が提灯をもつて行かする

ものぞ。まつくおまへ入まするまへまでくらがりを
とぼく。お出なさつてと。法楽の人がいわつしやります。
丈夫挑灯をおもちなされとやらもじや。旅かでそう
じや。私ハ目明の孫ども。わて目わきがはさある。
さやうならおかしくとつて挑灯をさげて。五六
町出ましたら雨が。むかふから来る人が目くらぶつかると
ゆへあやまりました。ソコデ大ごゑをふりそて。おこまり
実いこの町ハ目くら死。向ふの人も会釈さ
をりかまへ盲でハなし。そちらハおのまへが。どう目

らくじや。イヤ〳〵おまへ盲じややまどうも。人々か突
うらやむ。おのれが目くらゆへ極まつて世の人をも
いゝ〳〵様〳〵し。おまへを盲しいふ。證拠は。なぞ覚
がるそいふのか。ヲヽ見んがある。おのれを盲じや證拠
揚は。このわけゆゑ。挑灯が。おのれが目なれ。からぬ
じやないわけ。ズツトさし出す挑灯の火は。中じやを
出さ門口。庭よくきえて仕舞てある十二ト気の
どくな盲ではござりませぬか。火もともさぬ空
くるな。挑灯をさげく。是でをかしうみしく

おりそのうへ本心をとへらしまうて身勝手なるらを。
おゑんじやうしとひ。清濁せうとも眼まりともかで
人ハヨウ似てそのござり候と。どうぞお手で火は
盲くハなりわけと。目くらまで味がいふまそのぐござり
ますと　休息

續鳩翁道話二之下

男　武修聞書

〽甘草ものゝかどをとりて世乃人の心をまろくさせる實あり
ことぐさにいへり。聞くに實ともおもはるゝ。かうりの人
とは世帯の人をこゝろあはせて和らぐるさまをいふ。その
こゝろを思し。子細あることのみ。言をとゞめて都ゝ
告る。いかにある義理の聞えん。不破の實。揚津の国
なれ。浪人の實なるかひの遠坂。内さへ不情など。言
あり。今此辺のこゝろの人つるよ。おそれ数ゑの

んとなして。私欲をふせぐ事は。柿実を味わうごとく。
旅人を留むるがごとくなるよし。あるじをもてなしとくし。
もうかとれ。存じひのことがあり。悪念はいれば。私欲出来よ
万人をそこなうて。人の生命をざいなふこと。多くなりんと。
しら鏡なさるなり。実宗のたとへあるさ有経へ
をとどや。これ紛れの旅をあさくすふけるの自暴日
新の工夫ござりますされば絡じにもが。人の音と
多ひなするは曲かまがくの弟鬼顔身縁自より。
おかのがございますすゑとこの身は父母の縁なり

よろく生ずるといふはなんだ。畢竟天地水火の塊
じや。仏家では。地水火風のかたまりじやとかた
て。是を四大といふ。此の四大もとんで。是をうかせ
んで。六根と具足いたします。六根とは。眼と耳と
鼻と口と身と意と。この六つじや。これをまた
六識ともいふ。此上に七と心識と云ひ。第八を
頼耶識とも。又含蔵識ともいふ。此第七の心識が
一切の善悪邪正を弁別し。第八識は一切の種
を含んでおくぞ。去るとするのでなくて。何もかもおさめ

なりことこまを八識といへ。識といふ。あつといふてすどや。
さて六識に對するところを。五塵と書て。味し
觸るとは。こゝまを六塵といへ。かくそを世界に。あつと
あるとその。此六つの和合。ありまするとのがござりま
せぬ。むけるすと妄しうすと。幸業やの君あつし
ところでうくずんくチンプカンにめくらぬ妄しい
うすれ。識着にかくる紙なられませ。此分て八閑な
うい。只さしおくる事。重ねて不用。再用の事は。
思ふらずして。物をかいおなること仰られて。貝へるが

頃年はきくが役志つことつんまととを行の色て志らぬ
くぶんろのと實どとし行の志とと志らず。只よくの云。
是をわ別すろとのれ。六識よう志まどとと。ゆて
ころい方へ。かくし、さかうれ云うまいべ。身七の人を。
志川りり致思うて知がおまいべ。人の名がつまらぬ事。
さかよれべん心に大切な實不じや。志てく沙汎を致
しそうらくそうと。がのかする惡業と。かりし
性う中ら。恐怖いとのじや。おそまへてたよ人なまも
どとも。己の東海道くは今切名根。ありうは路

さし。福島横川すべて満国の御賞翫で。明六ツの
お太鼓がなると。御城ぐわらく。けふも御役人さま
がたへ。一同に御登城なさるまでござる。こまが
明六ツの太鼓をきく。お上下をかけるのでござり
ませぬ。夜までも八ツでも。何時でも太鼓をお
御殿をばさつてふよろく。夜中何どき。御用掛が
届つくもちろんおさしつかへがござりませぬ。人の
いのちもまかせて。ねてもさめても。忘れもしねへ。
恩をつくしむのふが。書しておきます。御威光や。

三味せん太鼓。端中さまがんどうけども。つき
ふうつく嫁しい甘ね。誰しも用人も振りまと
ども。いつくも。女つく志まして。浅くの浅海こし
が。さうど。明六ツの太鼓を背負く。門をひらくと。諺
人の通りかゝる。やし仰くも。上下を着るがいたしねと。
いそがる。其暇に。よいものとまるいものも。ありう
横て仕白人振るものじや。是じやふ御くん。心の篇
が。きようつくとどんな太鼓が鳴らしかうやまませぬ。
揆ず。明命をうけころとも。御てある。是は佐いく。

おそろしいことがござりまする。所は江戸の神田辺とやらの。名は何がしとやら申して。いたつて貧乏なくらし方。夫婦に子供三人。家賃といふが二十四文女房は二十八九。家は九尺弐間のうら店。亂の髪をかんざし。せうな住居。商賣は何にしてもさめさめすもならう。只明ても暮しても。一合酒と女夫喧嘩。小博奕が商賣同然。おさん朝寝し。夜る夜ふかし。什を義理に積でとた。まらぬ身持悪。どうどう。貧乏の底になりつく。せう事ましいよ。

安商賣と出かけ。四五百文の銭で。親子五人がその日ぐらし。いつも五百文ぐらゐで大根を買て。其日一日。江戸中を。大根こくと洗ひあるいて。暮がたに七百文ぐらゐし。内へ戻ると。米買へ。酒買へ。醤油買へ。味噌買へ。子どもの菓子ぐそくの手間。弐百文の銭が。あと一日の家内用金のこつこつ五百は利あすの商賣のもとで。一日休むと。一日くらさぬわけがある。小せがれ身代が立つ中々の身過仕て。雨がふると。それまで日中遊んで博奕うち

頭痛がするといふそへ。貧しき人は女丈夫なんとは。
親子みんながくらひをよみするも。折々あること。さて
御しとこんな時は。おてらもうすくさむし。お互に
さうが宜しい。是はこまちぞんじますふ。そこではや。かく
さ母の。おもしやる事を守なんぞ指さぐ。暫くして。
けやうは時がおろく。難儀な薬とせばうれ
随分ご孝心な親のおもしやることと。ヨウすのはなりま
せぬ。さてかの大根ならば。何の畑の一本の大根を
菜のひ。朝こそつかうなしく売ますといふがどうして

年中を日に一把の大根もうりまして日ごしとこうまと
べ。さや晝すぎ。服乃時は八つさがり。銭布の
中に。御ぞ七文の銭も。くすりもどらぬつまらぬ
ぬ。此大根が。薬ぐすりとまぞふ。七百文の銭と化
ぬること。忽おもへ。釜の中に胡椒の薬がでかご
うしくしくしうらや。工夫しおぼえしいつのまに
か。両国橋をわたり本所の亀沢町と大根
大根しうりあるく。此おやしきの表長屋の
ましとの門より。コレ大根やとよぶ。ヤレうれしや。先

知行にありつくとよ。それとおもへバ表門へまはつたへ
二ツ目のむしこ窓のうちから覗くのじや。ソコデ大
根やの表御門から。首をさしのべて。あちら通へ
まはつてみると。門から三軒めの裏隣のうら。
門口には。家中と標札がうつてある。首をさし込で
こゝまで。掾さきの障子をあけ。旦那どのが。今
月代をそりまするとみへて。鏡をもつて向て。
自分で髪をゆひなさる。その大根のいうことにや
以て。百に二把づゝこゝのまする。ソレバ〇〇〇〇。井口

文ではしても、じやて。売るさかいうりさけ
まとさと。現在根のある事でござんす。ドフダ二把でお
実ならば、それならば。江戸中を泣あるひ
て。まだ一把も売ませぬ。なんぼでも売くれねば
ならぬ大根。いけ並べ一切やしませぬといふ。かのお侍が
うつとり。丈でをたらい。まつすぐにみへようしふせう。
新戸みづからあくとすましと言捨て。掾先の障子を。
くさとしめてしまうた。大根屋もいろくしやうこそも。
かの御侍のおいやうかね。ソコデ仕組をやうと

なく。ハテつまらぬ。モウ日の入かゝるをなし。何ぞといふ
百の銭を立腹しても。親子五人が其の命は
まもらぬ。あんしきものぢやと。手を組で案ず
とつくりと。極あの細盟に。フツト目が付く。まづ
大事の宝じやぞ。心の実否が。ゆだんなく。善して
おさら。細盟は聞およびの名じや。子路さまへ。君子
固より窮す。小人窮すればこゝに濫す。これ論語
衛の霊公篇に孔子陳蔡のあひだにかこまれ。
粮を絶ち。門人ちからつかれはてゝ。起こと

ならず。子路といふ人。まことに慍つて孔子に
見えていはく。君子も亦窮する事あり
やと申されければ。夫子答へ玉ふて。道とおこ
なひの正しきに。かくのごとく困窮するぞと問ひまする。
そのとき。孔子の御返答には。君子固より窮す。凡
人の貧富窮通はみな天命じや。君子と云は
困窮すべきときは。困窮をまもりて。天命に
まかせて。かまはぬものじや。困窮のときにあわてゝ
困窮せまいと。どうぞ廻りて。天命にさからふて

謀をつくすのみならず。されば困窮するときに
おいても。困窮なされても。われより志をまもる志
をと小人は困窮のときにのぞんで。無理な困窮
せまりしとあるく思ふ。然るに小人がおこりふかく
ならひに目がくらみ。なる事を指て小人窮す
共ぞ。然に濫すと。孔子も仰せのじや。これ
大極実の筆でござりませぬなら。まるゝものゝ苦れ
らんことを道ではれて。いかにもこのじや。難儀の無
心。艱難さへ。掛ぞん。或は病難。おいは貧乏をは

時が迫つて来らうが。それでも道を通らるゝものではござらぬ。
かるがゆゑに中庸に。君子は其の位に素して行
なふと。有るは天命の貧乏。ありがたい艱難の中
じん。ありがたい掛ぞん。有がたい病難とおもつて。大切に
天命を守つておると。難儀すら来ることさへ
ゐるときといふものでござるでも。貧乏してもよい
ある。かのづうく通するこゝろが出来るものじや。是に
よい譬がござります。天竺で猟人が猿をとらへる。
鳥黐をまるめて猿の通ふ所に投出しまする。猿はそれ

とく。かのとりわちと。隻手づつみなはなれしと。指の
はなして離れぬ。顔らく左の手ぐ。かのとりわちを
取除うとすると左の手もゆさつく。ますくあれて。
右の足ぬけてそろんとすまへば。ゆさ右の足をつく。
いろいろふ左の足ぐそろうとすまへば。足を
付く。只一トすわの鬚れとある。唇の手ないし。
こらくつりて。ちるまずさみぐ猿の猿の口うさ
なると。猟人が手足の間へ棒を通して。ぶらつく
うつしきてましく。足もこれも身を通さんと

すりおうて。猿の猿になるのぐござりまと。はしめ右
の手でつかんとき。離ずと。さつし辛抱しそお
るしかのづらり。手れあてまうく。鬚ハなまそ。自然と
うかうくさと通すふを辛抱が出来ぬふよわくうろ
ふ人離ハくいのちをとられまふ。ナント気のどくなまそ
猿しやござりませぬか。やうく辛抱が大事じや。
うろへまうぞうろへると。猟じくらひが利うまります。
ソコデかの大猟ハ。猟さ印の隙子ハのくあるゆゑ
かるこ人ハなし。かの猟ぐらひと。取のかまで。大猟

赴こ把のしく。ソツトかくと。怖いものじや。今までひ
ろうこ在男が。立どころに使うなつくみえへのか
らだを。ちぢつくもおくすがなりぬ。ヤデ荷とうろ
ぎ出しく。門口を出ようとすると。障子のうち
から。コレ大根屋と呼かけられる。ぬかしぬ顔ぐ。ぬ
うゆせねといつて。イヤく立て行ずろまい。その大
根買うといひさる。障子をさらまと明しまさ。大
根屋もびつくりしぶ。ぞうぞして迹くいのうと
おめひ。何把など入まするぞし。売ハ出来ませぬと

いふ。イヤくちしこでハ買ぬ。その大根ことごとく買ふ。
け様さまへなしづくるまでいるまる。サア大根屋も
一生懸命。障子の方をまちくあるうち。羽ざらひ
の出しやうもかつらぬ。そさう羽盥が出されもせ
ぬ。とりふて売まひともいゑまず。迹く四うまを
荷を捨て逃つくハなるず。千百万の後悔も今さ
ぬかくろろふ合点どうろくとしてみると。かのお侍
が。大根屋のうれときろとんくつまをかそうろうろ
とんく居るぞよ。まづ羽盥から出しく。大根の敷

と。かぞへてみましたらば。大根壱本が惣身に冷汗
を流して。モウ切らるゝかと。ぶる〳〵ふるひ
がら〳〵の。かる塩を。ぬりつけてホツト出して。去ば
手をつき。旦那さま百姓平に御免なされませ。
何とぞかくしませう。先刻も申ますとほり七総ゝ
まづ壱文の商ひも。いたしませぬ。このまゝ帰りますれ
ると。親子五人が。餓死するはかなりませぬ。
かういふ貧のぬすみも。根性がんでもなく次第もご
ざりませぬ。七ツとうしふ子どもが三人ござりますぞ

親子五人の命を。お助なされて下さりませと。色青
ざめて。涙をこぼしてなげけば。かのお侍
おりひの顔。気ぞそのよい人で。さらに立腹のけしき
もみへず。イヤ〳〵其盗人に及ばぬ。まづ大根の数を
よんでみろ。恐ぐなく大根をかぞへて
よくとしろが。卅十三把。かの何某が七百六拾
四文の銭をとり出し。かの大根をよんで。サア
そち方がいふとほりに。卅十三把。七百六拾四文。扇に
かゝなどしひをそへてわたし。貧のぬすみとして

といひながら。二まきが指柱は。能々よくまでそかると
見えるに。此胡ごしひは。親や子おしとかして居
るなれど。ただ親子足をおしつ斗でへ立まひ
んのおもひゆうもありさうなそのじや。それは
智めぬ。この胡盛を打きをと。持く埒くとら
かうと品案をし。心の垢をおしひれとせと云
捨く懐子を去めしくらへまゐる。大指食を
夢ゆんくやうなうこうこへやう。ゆかしいゆかし。それも
いてまぜ。冷分うなふ胡盛と。然と。若の中へ入て

子くふかのかしさとらずて出て。そぞめく生く
ゆうよ覚えるが。私うしへとおへん心が。猿のうらま横
くらうく。ウツくと家ま増。覚うら經文ま説
うある。観音の出利生。刀刃段々壊の。功徳の
晩じや。堂なれば小言うしひなうう門口を這入
と。若ぞ務を投すて。錢紙布を探げ。庄
ふ音くわなずうぬ。まず翌日の手くずうりじや。
百が米ぐ。九四文が薪をとく。十六文がたのふう
うんと。子どものとるやぐるくうう。今夜の濁酒の

さらふまで。のこる所もなし。でしやわく。さてい
たる所まで。それ御まへそやりつれば門口を
そつとそつり。まかしてより出こしをうけて
うらぐのひとをやぶりもせず。袖もいそぐ
さし御ておる。女房へしまさおもひ。乳呑
まで。ふるらく御ちご。懐よりひおせらし。さん
宝蔵枡もいふ屋さいちひ一調子とりよて
かりよの銭をみせて。いやまうさまうのどの
ゆうす。御ひくだされ。居わたくみれのか。袖への

らしひ夜つく床ての乱。えくもうるゝ御情
愛と。少語窗と上くえてと一言も返答せ
ね。ソコデ女房が。合点が中をぞ。其の中とうれしば
売上の袖をそのまゝ。引かえるまゝね羽盥が
わる由恋。これはあるさがまいつれ目くゆうつまや
つる。これの内まれ不和合かすでしひ。勧つさ
とい羽盥とかひ。何ぞまけがなさう。おとと
さらかけく問つある。そこで夫婦も。両月うが
て。久よの始末と。いろ/\始終をかし。さらく

其方が手まへを面目ないと。むしやうに夢の
さめたやうな。これが先はいろいろなものじや。かの
御侍が。心を悟へと。此是念の一言太相乃
操て様ならぬは。孟子のいはれた。羞悪の心は
義の端なりと。仰られたもこれじや。此心の
となるは。本心の発見。恥を知る人は手まへを稼ぐ。人は
爰はよくよくのこゝろ得すると。恥を知つて。恥より
ともおもはぬ人は。こゝろがまだまよつて。たとへば
猿のくすりぐ。手のとゞかぬやうなものじや。幸に

し太相なれば。お侍は出あつて。有がたいは御意見
と頭をさげ。本心に立戻りました。これを観音
の御利生と云ふ。うしほときまつ網盥とおすくおふ
せうし。悪く盗をはなれもしろそが針く。そしめて
恐ろしいとおもふものが。後すれ心よりおそろしく
拍子なり。古歌に一鳴子とへおのが罪の手世なり
おどろきて心とさわぐ村すゞめかな　ことには
こゝまでかくす人も。すぢめなれば己が悪事におどろく
けれども。隠れなき尻をとらるゝ。遠入る

せうはなられ。明(あけ)くれにくらして村(むら)ぢうの。後(のち)には
鳴子(なるこ)に馴(なれ)く。どうやらかうなると。ほど〳〵じや
ことを習性(ならひせい)と成(なる)といふて。よい加減(かげん)な目と
さるゝなと一生(いつしやう)するものに成(なり)ます。この大根
よりも。後(のち)には大盗人(おほぬすびと)もなり。首(くび)の座(ざ)に直(なを)る
やうに成(なる)のじやぞよ。がいかのその。出家(でけ)さんの教(かう)
が耳(みみ)へ入(いつ)ても。うかりが出来(でき)てみますべ。首(くび)きり
まで気(き)づかひなし。これぞでんまでな。お侍(さむらひ)は観音(くわんおん)
さまじや。刹刀刄断(せつとうじんだん)壊(え)の心でござります

洛東(らくとう)清水寺(せいすいじ)の。出現(でげん)仏がかけさる。絵馬(ゑま)をみま
をみませ。罪人(ざいにん)が出でゝまそ。首(くび)の座(ざ)に直(なを)って。首(くび)
をさしのべてゐると。其後(そのうしろ)に太刀(たち)を抜(ぬい)て。太刀(たち)を
ふり上(あげ)てゐる。其上(そのうへ)の方に。観音(くわんおん)さまのおすがた
がいつもきえて。光明(くわうみやう)をあらはしてござると。太刀(たち)より
の太刀(たち)が。段々(だん〴〵)とをれて。なにが出てある。ござる
ことは。ごぞんじでござりませうが。これが刀刄断(とうじんだん)
壊(え)の功徳(くどく)を。あらはしたものぢや。これ心(こころ)
の手しや。こゝろさへ正(ただ)しくすれば。手向(てむけ)につきされ

なにとのじや。かのが目をみて。仁者は敵なしともいひて
わり。されバ大抵もこまりし女丈夫どもを
合せ。辛ん年まめなく。疾をたてゝいき。終には年
目られ。お気の八百屋となつく。くじめへくかの
細盥と御侍の方へ以ぢし。厚く御禮を申て。
この少年さの四出入をまかり申さ。これが舊
識の縁を。ぞんぐりしてやすものぐだくり
ますず。是ぞ活がう。さる竹田全了俄に
目くりが出来く。大まりしを。備前の医者殿

おえくめしうさ衆が。肉傷眼でなかりぬといふて。
いぐハせんと。いふんど拙ひましらが。幸ひ韋国
に華陀流の療治をする人がありて。脳伸をひ
いて。頭痛の虫をとりの目ん玉をとりぬいて。
洗濯するのと。かわりぐの評判かの病人さう
そく頼みてゆきさ。療治をこのましさ。医者
どのんぬくうけあひ。ちまた目の玉をとり
出しく。洗濯すると忽まみえる様になると。
中ぞそ療治にかゝり。難なく目の玉をぬくさ出

して焼酎であらひ。つまし楊をほぢやうて。二つの
眼の玉を。竿にかけて干ておかれた。時に隣の
どこかの烏がでゝ来て。屋根にとまつてゐる烏が見
付て。目の玉を一ツくはへて逃て行た。その跡
にてはおどろきゐ。医者どのが見付て。驚き
こまりはてられたが。手ができて。目の玉が紛失し
ては。病人へいひわけがない。どうしたらよからうと。
工夫してみられたが。工夫もあまりなかつたものじや。
側に寝てゐる。狗の子を見付て。あれは屋敷の

がある。此狗の目の玉を借用して。病人を本復
させうと。忽ち狗を捕へ込んで。苦もなく狗の
目をぬき出し。狗はさぞ迷惑。きやんくいうて
痺あれど。医者どのは。おさめて寄つさで。是も
焼酎であらひ。よく清うして。烏の喉をしらべ。人の目と
一対にして。ゆるく病人の目の穴へはめまするを
奇妙に目が見えて出しさ。病人はおほきによろこび。
狗の目が変つたとも志らず。さまざまと
うれしがると。医者どのもおかしさをかくしく。

どうじや。其ハかくさる事ハないか。イヱ〳〵いつはりを
虚つきまし事ハございませぬといふ。医者どの
押かけて。何ぞ虚つく事が有さうなものじや。
ヨウ気を付て見さつしやれと。いはれて。なる程ソウ
おつしやると。まことにさう事がござります。さうづく
かんがへて。ぞう虚が申し。ハイ只今書院へ参り
まして。あとをのぞいて見さ。右の目でハ見へませぬ
左の目でハ。何やらこのやうに思ひますといふて其
ましたる此あとハ。名じや。ひだりの目ハ物乃目じや

これが證拠。銘々どりにヨウ似たものじや。忠孝ハ
よい事とおもへど。又どうかするといやになるごとく
お若へなされて。かうしてハまだゐませぬ。人を
まるで獣の仲間入をしてく。お主がかのものじや。
盗むの教のといふ好物。大よそまハかまいへられ
ども。まことにおくづの悔さがかまハぬといふてゐられぬ。
目のむれせんざうりんのせんぐくが来くござり
ままの。なる人の前に「ふりまゝなるのこゝやまの
おるくしも。わくてまる悪がまいとして。枕紙ハ

講談（こうだん）おもしろし中にまぜる。下編